戦国中山王国小史

高橋庸一郎

一

春秋期、周を首長国として中原には所謂十二諸侯[1]の国々が互いに覇を競いあっていた。彼等の活動の主な舞台は黄河の河口下流部から上流にかけて、黄河が大きく北に蛇行するあたりに至る肥沃な黄土平原であった。南も長江下流の沿海地方及びその中流平原にまで広がってはいたが、中原と同等の活動領域として歴史に登場するのは更にもう一時代後の戦国期を待たねばならなかった。しかし中原の北部は、広大な草原、砂漠が果てしなく広がり、そこには、早くから、中原の定住漢民族とは異った、幾種類かの遊牧移動の民族が、それぞれ独自の風俗・文化を保ちつつ、ある種の族長集団的国家を形成していた。彼等の文化は中原漢民族のそれとは全く異質のものであったが、同じ地平線を共有する大地に住うものとして、様々な形での接触が、彼等の間にも、起るべくして当然行われていた。ただそれ等の接触は、多くの場合、他の地域の場合と同様、平和的であるよりも寧ろ不幸な結果を伴う場合の方が多かったのであるが。

二

中原諸国家のうちで、これ等異民族と国境を接し、最も深く係っていたのは、燕[2]・晋・秦であった。春秋期、燕の北東には山戎、北には北戎及び東胡が、晋の北には、楼煩、大戎狐氏、西には林胡及び白狄、西には犬戎がいた。燕の荘公二十七年[3]に山戎が燕を侵し、斉の桓公が燕を援けて山戎を伐ったこと等が

〈史記〉に見えるが、春秋期でとりわけ北方異民族との交流を積極的に行ったのは晋であり、その相手は狄[4]であった。即位早々の献公が陝西の驪戎[5]を伐ち、その二姫を寵愛した為に、もとの公子の一人、重耳が、身の危険を感じて逃れ[6]、身をかくしたのは狄の地であった。後に春秋の覇者の一人文公となるこの重耳の母[7]は狄の狐氏の女であり、同じ公子の夷吾の母は、重耳の母の妹であったというから、これまでにも晋と狄との通婚関係は幾代にもわたって行われていた可能性は大いにあるであろう。晋[8]の始祖の唐叔虞は、周武王の子であり、次の成王の弟でもあったから本来純粋に姫姓の国であった。本来姫姓の国でありながら、長年にわたる北方狄人との交りの中で半ば狄国化した国は他にも多かった。晋献公十九年、晋に滅ぼされた小国の霍[9]、同じく二十二年に滅ぼされた虞[10]もともに姫姓の国[11]であった。又これに先だつ献公十六年にやはり晋に滅ぼされた霍国[12]、魏国[13]、耿国[14]等もそうした国々の一部であっただろうと思われる。こうして中原国家と狄人は、言語はもとより風俗・文化も大いに異ってはいたがその中間に、半狄人、半漢人の国々を出現させ、それ等の国々を媒体としながら、文化的な融合が徐々に行われつつあったのである。その後、晋では襄公七年、襄公が没した時、後継者擁立問題に関して趙盾に破れた賈季は、やはり狄に出奔したし、成公四年[16]に敗戦の将軍先縠が誅殺を恐れて出奔したのも狄地であった。晋は覇者文公の時代を終り、国内的には些か混乱の時代を迎えていた。この機に前後して秦は東に撃って出て、晋を越え滑国[17]にまで至り、晋の地王官を奪った[18]。晋はそれに反撃し、秦を伐って新城をとっているが、晋の厲公元年には、秦[19]は狄と謀って晋を伐ったのである。晋の混乱に乗じたのは秦ばかりではなかった。晋の北部にいた白狄が、秦の力を利用しつつ、燕と晋の間隙を縫って、中原の奥深く侵入し、鮮虞[21]と称され、一定地域を占有したのは多分この頃のことであったと思われる。その後、晋の悼公は和平政策に転じ、鶏沢[22]で諸侯と会同したのを機にして、悼公三年には魏絳[23]を賢とし戎と親をふかめさせ、又魏絳に国政を委ねて、戎狄との宥和を図らせた。この政策は功を奏し、戎人は大いに晋に親しみ、戎狄とも和親し、悼公は十一年に、魏絳の功績を認めて、魏絳に鼓楽の隊を賜っている。こうした晋の宥和政策の下で、鮮虞はほぼその領土的安定の為の基礎を築くことが出来たのであった。

三

鮮虞はもと鮮于[24]と称していた。即ち白狄[25]のうちの鮮と称していた一族であったと思われる。鮮は〈史記・朝鮮列伝〉、及び

後の鮮卑の「鮮」であり、于は匈奴の単于の「于」であって族長の称号であった。虞は、〈尚書〉の〈商書〉以前の書を〈虞夏書〉と呼び、帝舜を虞舜と呼んでいることや、又〈史記・晋世家〉にある唐叔虞の名の由来等とあわせ考えてみると、これも漢族で太古から秀れた者に与えられた称号であったと考えられる。鮮于が鮮虞と称しはじめたのは紀元前六世紀半ば過ぎであったろうから、彼等が中原に進出しはじめてから半世紀以上たってからのことであり、このことは白狄としての鮮于が、いよいよ自らを夏華の民の一部として自覚し、その歩みを始めたことを意味するのである。しかし大国の間にはさまれた小国が生きのびていくのは並大抵のことではなかった。

魯の昭公十二年に晋の荀呉が、高価な贈り物を持って鮮虞に道を仮りたいと申し出て来た時、鮮虞人は、その斉軍と会する為という理由が明らかに虚偽であるということはわかっていた。なぜなら、晋は献公二十二年虞国に道を仮りて虢を伐つと称し、虢を伐った返す刀で虞国をも滅ぼしたのであった。その時、虞国の大夫宮之奇が君を諫めたように、鮮虞の大夫達もやはり晋に道をかすことに反対した。にもかかわらず鮮虞の大勢がそれを許したのは、何も虞国の君がそうであったように、晋の贈り物に目が眩んだわけではない。晋という大国の申し出を拒否することによって蒙ることになるかもしれない、晋のより手ひどい仕打ちよりも、それを受け入れることによって受けるであろう所の、より小さいかもしれない災難に耐える方を、鮮虞が選んだだけのことであった。それに鮮虞人は、晋は鮮虞を滅ぼしはしないと踏んでいた。もし鮮虞がなくなれば、晋は直接大国の燕と国境を接することになる。晋の平公は、燕で現在位についている惠公には貸しがあったから、今の所はよいとしても、大国どうしが国境を接しているのは何かとトラブルが多く、それが拡大することが多いから、鮮虞という緩衝地帯は晋にとって必ずしも不用ではないと思われたし、又北方の異民族とも、間に半狄半漢の鮮虞を置いていた方がより便利にちがいないと思われたからであった。こうした鮮虞人の予想は幸いというべきか、不幸というべきか、的中した。晋は六月、鮮虞の地に深く侵入し、昔陽にまで到り、ついに八月、その地の部族都市肥を滅ぼし、肥子緜皐を捕虜とした。一族の他の者は燕に奔り、後、彼等は燕によって盧水に遷されその地に封ぜられた。晋は、この肥の役の帰り、再び鮮虞を通過するにあたって、鮮虞を伐ったのであるが、鮮虞はかろうじてそれをかわしえた。当時、鮮虞はまだ白狄族の名残りの移動国家的形態を残していた。肥や後に登場する鼓は、その鮮虞族の中の、いわば核ともいうべ

き、些か定着性を持ちはじめた一小部族国家である。鮮虞は以後約半世紀にわたり、幾度となく晋の侵入を受け、晋に伐たれるのであるが、そのつど巧妙に晋軍をかわし、或いはそれに耐え、或いはそれに反撃しつつ、その領域内に一国家としてとどまり続けることができたのは、偏にそのしなやかな国家態勢にあった。翌年八月、晋は、斉をはじめとする諸侯が、自分の主催する盟に参じないのを戒める為に軍事的示威行動をやって見せた。[10]鮮虞は、その行動の為に晋の軍隊が全て現地に向ったと聞いて国境地帯を警備しなかった。それを知った晋の荀呉は著雍から上軍をひきいて鮮虞の地に入り、北方の中人にまで押し進み、勢いに乗じて戦車で先陣争いを演じ、遂に多数の捕虜を伴って帰還していった。鮮虞は、魯の昭公十二年に、晋の荀呉によって、その主要なまちである肥を滅ぼされたのであるが、肥を追われた人々は、肥より、やや東方にある鼓に身を寄せ集って来た。魯の昭公十五年、晋の荀呉は三度、軍をひきいて鮮虞の地へ入り、鼓を囲んだ。[12]鼓の人のうち、特にかつての肥から移り住んだ人々は戦に倦んで、城ごと晋に寝返りたいと荀呉に請う者がいた。しかし荀呉はそれを許さなかった。そして鼓の他の人々にそのことを告げ、裏切り者を殺させ、更に固く城を守らせた。それから更に三ケ月鼓を囲んだ。又、鼓の人の中に降参を願い出た者があったが、食料もなくなり、力もなくなったと言って来た時はじめてこのまちを占領した。鼓に勝って兵を反すまで、一人も殺すことなく、鼓の君主鳶鞮を連れ帰っていった。[14]しかし鳶鞮は晋公に献ぜられたあと、帰ることを許された。鮮虞の人々は再び鼓の君主のもとに集り、結束を固め、晋への反撃の備えを整えつつあった。[15]魯の昭公は、六年後の二十一年、晋へ行こうとした時、河水まで来ると、鼓が晋に背いたとして晋がものものしく警戒するのに出会った。昭公は、晋が鮮虞を伐とうとしていることを察して、そのまま晋へは行かずに引き返した。その後、鮮虞も晋の動きを察知して一層警戒すること甚だしかった為に、晋はなかなか鮮虞を攻めることが出来なかった。しかし翌年六月、荀呉は東陽を見まわった時、軍を米の献納者にしたてて、実は車には米ではなく武器を積んで、鼓のはずれにある昔陽の門の外に休息させ、突然鼓を襲わせてこれを滅ぼしてしまった。鼓の君主鳶鞮は、再び捕えられ連行されて行った。鼓はこうして滅びるのであるが、その後、ここには又、多くの鮮虞人が集り城を築くようになった。そしてその町は頓[17]と呼ばれるようになった。幾度となく晋に伐たれた鮮虞は、晋の戦法を熟知し、それに対抗する為の軍隊を養い、徐々にではあるが、[18]その力を強大なものにしていった。[19]その頃、

晋地平中を治めていた晋の大夫観虎は、自らその勇力を恃んで敵を軽んじ驕慢であった。[50]魯の定公三年秋九月、鮮虞の人は、観虎のその驕慢につけ込んで晋の軍隊を平中で敗った。この頃鮮虞は、魯の昭公二十二年鼓を滅ぼされて以来、一応晋の掌中にはあったが、[51]度々叛いては晋の北方の地の軍隊を脅かしていた。[52]魯の定公四年、事を憂えた晋の士鞅は、同じ晋の東方でその境を鮮虞に接している衛の孔圉と謀り、軍をひきいて鮮虞の地へ入った。衛の孔圉はすぐ軍をひいたが、晋の士鞅は、一昨年の観虎の役の報復の為に鮮虞を囲んだ。しかし功をあげることはできなかった。[53]魯の定公八年、晋の士鞅は軍をひきいて郟を侵し、遂に衛をも侵した。こうして衛は晋に怨みをいだくようになり、[54]一方定公九年秋には、衛は中牟にある晋の車、千乗をうちはらって、五氏にいた斉侯を助けた。[55]又十年には、晋の趙鞅が軍をひきいて衛を囲んだ。[56]魯の定公は、十二年冬に、黄で斉侯と会して盟った。更に十四年、[57]魯公は斉侯、衛侯と牽で会し三者の結束を深めた。そして[58]魯の哀公元年秋、魯の軍をよく知っている鮮虞人を誘って晋を伐ち棘蒲を取った。この頃から鮮虞の一部は、かつての肥や鼓よりも更に北にあたる中山の地に城郭都市を作りはじめていた。[59]魯の哀公三年春、斉の国夏、衛の石曼姑が軍をひきいて戚を囲んだ。しかし攻めあぐねて中山に援助を求めて来た。この当時、中山は、他から援助を求められる程成長していたということになる。[60]魯の哀公四年夏、楚の人は、已に東方の夷虎に勝ったので北方中原地帯に目を向けはじめた。左司馬の眅、申公寿余、葉公諸梁が蔡の人を負函に集め、方城の外の人を繒関に集めて北方進出の準備をしていた。そしてある晩突然命令を出して、翌日晋地の梁と霍を襲ったが、司馬は豐析と鮮虞を含む狄、戎の人の助けを借りて、晋の上雒にまで迫った。晋は晋地を守っていた蛮子赤をさしだして和を請うた。この頃、晋の力は漸く衰えつつあった。[61]晋の平公十四年、已に、呉の使者として晋に来た季子は、晋国の政治は、[62]趙文子、韓宣子、魏献子に帰するであろうと語った程である。又十九年に、斉の使者晏嬰に、叔向が語った言葉に、晋は末世であり、もう長く国を保つことは出来ないとあり、晏子もそのとおりであると思ったとある。晋はその後、前述の三氏の他に、范氏と中行氏、更に知伯が加わって、この六卿が相争う情況となった。[63]魯の哀公四年九月、晋の趙鞅は晋の都邯鄲を囲み、そこを守っていた荀寅は鮮虞へ奔り、冬十一月邯鄲は降った。荀寅は、皮肉なことに、鮮虞をかつて最も執拗に攻めぬいたあの荀呉の子であった。[64]十二月、斉の国夏は晋を伐ち、晋地の邢、任、欒、鄗、逆畤、陰人、盂、壺口を取って、荀寅を擁してい

る鮮虞と会談し、荀寅を趙氏の地柏人に納れることにした。しかし翌年この柏人は、晋によって囲まれたので、荀寅は斉に奔ることになるのである。[55]晋の六卿のうち范氏と中行は、晋の定公十五年、定公との戦いに敗れて鮮虞の力が強く及んでいる朝歌にたてこもった。[56]魯の哀公六年、晋の趙鞅は、范氏と中行氏を伐ち、両氏が北方へ逃れて鮮虞の地へ入ったため、鞅は更に軍を北へ進めて鮮虞の地へ入った。その後晋は、[57]出公の十七年、智伯、趙、韓、魏が力を持っていたが、出公が斉に奔り、哀公が立つに及んで、晋の政治はすべて智伯がとりしきるようになっていた。哀公の四年、趙襄子、韓康子、魏桓子は共同で智伯を殺し、その地をすべて奪った。次の幽公十五年、魏の文侯がはじめて立って魏君となった。次の烈公十九年、周は、趙、韓、魏に命を賜って諸侯とした。こうして晋は事実上滅び、春秋の時代は終って戦国の時代が始るのである。

四

こうした、晋のうち続く内紛の間に、鮮虞の人々はいよいよ中山を中心に集り、結束を固めていった。又、中山という地名を鮮虞の国名として用いるようになったのも、この頃であろうかと思われる。[58]中山が邢国を亡ぼし、狄人が衛を滅ぼしたのはこの頃である。三晋のうちで、鮮虞と最も広い範囲で境を接していたのは趙である。[59]趙は祖先は秦と同じで嬴姓である。[60]秦の先祖に大費という者がおり、その子の若木の玄孫は費昌といい、その子孫はある時には夷狄の間に住んだというから、秦は狄の血を持っていたのであろう。[61]秦は、風俗が戎狄に同じであると言われるのもその為であろう。この秦と趙は同姓であるから、趙ももとをただせば、その君主であった晋公より、更に狄の血をうけていたに違いない。その意味で、三晋のうちで趙が、襄子の時代を中心とした、中山が起りつつあった同時代に、北は代を領有し、南は智伯の地をあわせて韓、魏よりも強大となったのは、中山にとって幸いであったろう。[62]中山の武公が初めて立ったのは趙の献侯十年のことである。武公は即位するとすぐに、鮮虞の民をここまでひきいて結束させてきた自分の父を、さかのぼって文公と追尊した。文公は、建国の基礎を築いた秀れた指導者であったにちがいないが、その完成された基礎の上に初めて位についた武公は、あまり秀れた君主とはいえなかった。鮮虞の人は、長年待ち望んできた建国を果したよろこびからか、[63]昼夜を分つことなく歓楽にふけり、男女の風紀も乱れきって、亡国の相を呈しはじめていた。しかし武公はそれを抑えることを知らなかった。当時三晋のうち、魏は文侯であった。

文侯は名君で、多くの賢人を側に集めて国威の発揚をはかっていた。文侯は、その一策として中山討伐を計画していた。中山は、それまでしばしば魏の国境を侵し、魏を悩ましていた。その為、文侯の一族で最も勇猛の将、樂羊[78]の子は人質として中山にさし出されていた程である。文侯は、狄によく通じた翟黄にはかり、翟黄は狄の地に明るい翟角を推挙した。文侯は翟角の案に従って、趙[79]を通らせてもらって中山を伐とうとした。趙ははじめ拒んだが、後それを受け入れた。そこで文侯は、翟黄の推挙に従って樂羊を将として中山を攻めた。武公のもとで国政乱れていた為に、新生中山国は誕生わずか六年にして文侯の為に滅ぼされたのである。魏の太子擊が中山を守備することになったが、擊の手腕が秀れていなかったために中山は治まらず、文侯は擊を呼び戻し、賢臣[80]季克をつかわし、はじめて中山は治まった。この時、中山は祖先の祭祀を絶やした訳ではなかった。武公は狄地に出奔したが、その子は太子として、擊、季克のもとにいた。季克[81]は厳しい能吏であった。寵言を聞かず、寵貨を受けずという信念を持っていた。それだけに、中山の人々は季克に親しむことはなかった。魏[82]の武侯九年、狄の人が魏の軍隊と滏で戦った時、李克は意半ばにして本国へ帰っていった。魏軍は敗走し、中山では太子が即位した。それが桓[83]公である。桓公は都[84]を顧から靈寿に遷し、ここに中山は再生したのである。再生中山は、李克[85]の苛烈なまでの財政強化政策のあとをうけて、安定した経済基盤の上に軍備を整えることが出来た。一方趙は、敬[86]侯元年邯鄲に初めて都して以後、斉を伐ち、魏を伐ち、かつて鮮虞が晋から取った棘蒲を、その後魏の支配下にあったのであるが、それをも魏から取り戻し、更に、燕を伐った斉を、燕を援ける為に伐つなど、その軍事的活躍には目を見張るものがある。しかし、これは以後、趙武靈王の時代に至るまで約六十年間の戦国前期の、最も激しい中原諸国間の戦闘の幕開けであり、その中心にいつも趙があったことを物語るものである。そして中山国は、小国の常の世の習いの如く、こうした打ち続く大国間の争いの中でこそ生きのび、かつ国力を養うことが出来たのである。趙[87]の敬侯十年、趙の軍が邯鄲から中山へ向って打っ出て来た時、房子臨城で互角に戦い、くい止めえたのも、この時すでにそれだけの力を持っていたからであった。翌[88]年、魏、韓、趙は共同して晋を滅ぼし、その土地を分配して、趙は更に強大となった。そして同[89]年趙は、今度は西方から廻り込んで中山へ軍を導入させて来た。しかしこの時も中山は、中人でくい止めることが出来た。これ以後中山は、あまり大国の侵略を受けることはなくなった。大国は大国間同士の争いに専念し、小

国に意を払ういとまがなくなったからである。こうした大国の戦乱に乗じ、或いはそれをかいくぐり、自国の力を養ったのは中山だけでは勿論なかった。中山国を造った鮮虞族がかつてそうして来たように、中原北方で今なお活動している異民族達は、この機を利用して南進するものが多かった。中山国は、かつての同胞達の進入をくい止める為に、今度は自分達が長城を築かねばならなかった。[37]中山は成公の時代になっていた。中山が長城を築いたのは、趙の成侯六年のことである。長城を築いた中山は、いよいよ政治的安定を得て国力を更に充実させていった。中山君成公の手腕は、中原諸国間でも大いに評価され宣伝されたことであろう。こうした中山国の高揚を怕れる者がいた。それは魏である。魏はかつて文侯の時代に中山国を滅ぼし、短い期間ではあったがそこを支配したのであった。しかし現在の中山の財政基盤は、当時の魏支配の時期に確立されたものであるという自負と、中山に対する親しみも又、魏にはあった。魏も又一方で北方異民族の進出に悩まされていた。恵王十九年に、魏は已に長城を築き、北方の固陽に要塞を築いていた。魏は中山と利害の一致する点も多くあったのである。魏には当時、斉の孫臏[38]と対等に戦いうる唯一の軍師庞涓[39]がいた。秦、斉、趙を敵として戦わねばならなかった庞涓は、[40]北の脅威を除き、かつ己の力を拡充する為に、一石二鳥を狙って、中山の成公を魏の宰相として迎えるように、恵王を説得したにちがいない。一方、長城を築いた成公の意識は、完全に漢人のそれであった。中原の大国三晋は、成公にとっては長年の憧れであった。群臣の反対を押し切り、[41]未だ幼少の太子を置いて、一人逃げるようにして中山をあとにした成公が魏の宰相となったのは、魏の恵王二十八年のことであった。この時残された幼少の太子こそ、後に中山王国の黄金時代を築いた中山王霍[42]である。霍を守り育てたのは、賢臣司馬賙[43]であった。伝世の文献では司馬喜と記されているこの人物は、戦国の世に大成した人物らしく、又権謀術数の人でもあった。幼少の霍の側から、爰蠆、季辛などの有力な家臣[44]を一人づつ消していったばかりでなく、他の公子さえ餓倉[45]を焼いたという罪で処罰し、霍一人をもり立てていたのであった。霍は、成人してからも司馬賙には頭があがらず、政治は一切司馬賙に任せきっていた。そして自分は、専ら文化的な方面、即ち中原大国の持っている高度な漢人文化[46]を摂取することに努めた。霍の修めた学は五経全体にわたっていた。又その霍をとり巻いていた文人[47]や芸術的職能技術者の層は、非常に厚いものであったにちがいない。こうして中山国は、司馬賙の富国強兵策の成功の上に、白狄を中心とする北方遊牧民族の血をひく霍

が、その伝統のうちに培われてきた感覚を中原漢族文化に融合させることに成功した時、戦国期、他の地域には全く見られない、一種異様にして独特な造形文化を創出することが出来たのであった。

司馬睿は、中山をほぼ己一人で支配していた。司馬睿は、内[12]に秘めた策略家でもあった。いつの日か雷に迫ってその禅譲を受け、中山を名実ともに支配する日を夢見ていたかもしれない。しかしそうした夢の実現をあえなく打ち砕くような事件が北隣の燕の国でもちあがった。燕侯で、はじめて王と称したのは易王であったが、その後に立ったのは噲であった。噲は、宰相の子之の策略によって、子之に買収された蘇秦の弟、蘇代、鹿毛寿等にそそのかされて、王位を子之に譲ったのであった。子之は南面して政務を司どり、自分は北面して子之の臣となったのである。三年にして国は大いに乱れ、燕の人は苦しむことになったのである。[13]太子平は兵を挙げ、子之の軍と相闘うこと数ケ月、死者は数万に及び、民心は全く国から離れたのである。そこで斉王[14]は、孟子の進言に従って燕を伐ったのであるが、燕の士卒は戦わず、城門は閉ざされず、燕王噲は討ち死にし、子之は逃亡し、斉は大勝したのである。この時、中山の相邦[15]、司馬睿は自ら甲冑に身をかため、大軍をひきいて燕深くつき進み、不頑なるものを誅して、啓き得た領土は方数百里に及び、築いた城は数十にのぼったのであった。この功によって、司馬睿の中山国に於ける権勢は、ますます強大なものとなったのであったが、しかし禅譲は望むべきもなくなったのである。燕王噲の件事は、[16]人々の語りぐさとなり、やがて笑いぐさとなって、王なるものの基本的な戒めとして世間に流布していったからである。燕征伐から帰還した司馬睿の功を紀念して、雷は、いくつかの大鼎、大壺を鋳した。その銘文には、はっきりと燕王噲のことを嗣王[17]への戒めとして明記しておくことを忘れなかった。雷の墓陵は、その上に壮麗な享堂が建てられている壮大なもので、司馬睿が雷の命を受けて建てたことになっているが、その様式は全く漢族のそれであった。王雷が、その生涯で唯一自分の意志によって司馬睿に命じてさせたのが、この墓陵の建設ではなかったかと想像される。

雷のあとを継いだのは、この子盗[18]であった。司馬睿は長生きして、この盗の時代にも生きていた。司馬睿が天寿を全うしたのは、趙の武霊王十七年頃ではなかったかと思われる。この頃から中山王国の勢いにはかげりがほの見えてくる。

五

趙[15]の武霊王八年、中原の他の五国が王と称したが、趙君だけはこれに追随せず、ひとり君と称し続けた。武霊王は歴代の趙侯のうちでも、名君の誉れ高い人物である。武霊王が位についたのは、まだ年少の時であった。趙はまさに戦国のただ中にあった。その頃から武霊王は、中原諸国間の戦いもさることながら、北方の異民族がたびたび大挙して趙を脅かすのを見て来た。特に斉が、燕王噲の事件に乗じて燕に軍を進めた時、斉と行動を共にしていた中山は、征燕の直後、軍を撤退させるに当って、そのまま一気に趙まで大軍を南下させ、斉の強兵をうしろだてとして趙の地を侵し、趙の民を大量に捕虜としたのみならず、河水を引いて、趙の最北の要塞、鄗を囲み重大な打撃を与えたのであった。[16]中山に対してこの恨みを晴らすことは、武霊王にとって一つの悲願とさえなった。[17]十七年、王は九門宮を出で、野台を築き、その上から恨み深き斉や中山を望見し策を練った。その、練りに練った策の結果が、胡服騎射の提唱であった。裾の長い漢人の服では馬に乗れない。馬に乗れなければ、騎馬して襲来する中山、北狄と、到底渡り合うことは出来ない。こちらも胡服し、騎馬弓射してこそはじめて、彼等と対等に戦い、彼等に打ち勝つことが出来るのだ。武霊王は、[18]渋る群臣達をしり目に自ら胡服に変えた。最も手強い反対者は、[19]叔父の公子成であった。武霊王は、自ら成のもとに足を運んで説得に当った。中山に備え、中山に勝ち、鄗での中山への恨みを晴らすことこそ、先君[20]簡子、襄子の意を全うすることであると説く武霊王の熱意に動かされ、再拝稽首した成は、王が賜うた胡服を着して翌日参朝した。こうしてはじめて胡服の命が出された。[21]武霊王十九年の春正月のことであった。武霊王は、二十年、遂に中山の地を攻略した。中山は五割して、その地を趙に与えた。王は更に西行して胡の地を攻略し、楡中まで行った。林胡の王が、武霊王に馬を献上し和が成って、王は引き返した。代の宰相趙固に胡を司どらせ、胡兵を徴集させて次の戦いに備えさせた。以後武霊王は、執拗に中山を攻めぬくのである。翌年武霊王は、再び中山を攻めた。王は、自ら三軍を統べる将となり、丹丘、華陽、鄗、石邑等を取った。中山は、四邑を献じて和を請い、王はそれを許して戦いをやめた。二十三年、王は三度び中山を攻めた。二十六年、また武霊王は中山を攻め、地を拓いて北は燕・代まで行き、更に西行して雲中、九原にまで到った。この戦いで、中山王盗は傷つき敗退し、遂に斉に奔りその地で死んだ。こうして中山国は実質上滅亡したのである。中山では、その後盗の子、勝をたてて王としたが、中山にはもはや独立国としての力は已に残っていなかった。秦の昭襄王十一年、中山は

斉、韓、魏、趙、宋と共同して秦を攻め、塩氏まで行ったが、これは趙の命のままに動いたまでであって、自らの判断による行動ではなかった。趙の武霊王は、その二十七年[15]、国政を王子何に委ね、国を譲って恵文王とし、自らは主父と称した。国は実質滅びたとはいえ、中山王勝は、いつまでも趙の属国に甘んじてはいられなかった。やがて中山国の再建を目指しはじめた。その為に、民心を得ることの肝要さを感じた勝は、首を低くして厳穴の士に会うことを好み、その教えを請うた[16]、その結果、民心は勝に親しみ、勝に心を寄せる賢者は数百にのぼるまでになった。趙の主父は中山の処置に苦慮しはじめた。このまま中山の再生興起を見過ごせば、中山は再び趙にとっての脅威となりかねない。かと言って、賢者を戴く中山を今滅ぼせば、主父の徳は地に墜ち、趙は中原の暴国とされることになろう。主父は李庇の意見を求めた。主父の心中を察した李庇は、中山は当然伐たれねばならない存在であり、早く伐たねば燕、斉に先を越されるであろうと述べ、その理由を「夫好顯厳穴之士而朝之[17]

則職士怠於行陣　上尊學者　下士居朝　則農夫惰於田　職士怠於行陳者　則兵弱也　農夫惰於田者則國貧也　兵弱於敵　國貧於内　而不亡者　未之有也　伐之不亦可乎」と、中山征伐を正当化して展開してみせたのであった。主父は、李庇の論理を受けることで自己をも正当化しつつ、中山攻めの準備を進め、西河で楼煩王に会い[18]、その地の兵を徴発した。当時、斉の湣王[19]は強盛で、南は楚の相唐昧を重丘で敗走させ、西は三晋を観津で摧き、遂に三晋と組んで秦を撃った。主父は、この中原の盟主ともいうべき斉を引きこんで、その助けのもとに、その了承をとった形で中山を攻め滅ぼしたのであった。中山国の最後の王、勝は、趙の主父によって西方の膚施に移され、中山の祖先に対する祭祀はここに廃された。こうして戦国時代の中山王国は、武公の建国以来、百二十年でその命脈を絶ったのである。

六

戦国中山はこうして滅びるのであるが、この国が戦国時代に残した足跡は決して小さなものではない。近年、河北省平山県の中山国王墓から発掘された夥しい数の埋葬文物は、それを証明してあまりある。その礼楽器や宮廷内装飾品や装身具などの数々は、意匠、質、豪華さにおいて、中原の漢人文化に伍して決してひけをとるものではない。これ程優れた文化をつくり出した中山国が、一朝にして永遠に亡びさることがありうるものかと慨嘆にふける時、漢代に於ける中山国の存在が、どうして思い出される。一九六八年、河北省満城県陵山で発掘された中

山王劉勝とその妻の墓から出土した文物は、金縷玉衣をはじめとして、長信宮燈、朱雀燈、羊燈、博山炉、楚大官鐎鍾、金銀錯鳥書文鐘などは、平山県戦国中山国王墓出土の錯金銀虎噬鹿銅器座、錯銀双翼神獸、錯金銅獸、銅鹿柱大盆、十五連盞銅灯、銀首人俑灯などの、構造技術紋様のモチーフ等、多くの点で共通のものを見ることが出来る。漢代中山国は、戦国中山国の、民族・民俗的にも、文化的にも、後を襲ったものであろう。漢代中山国は、一旦滅びた戦国中山国が、漢民族やその文化の衝撃を受けて、新しい息吹きとともに、不死鳥のように再生した姿ではないかと考えられる。この点については、後日稿を改めて論じてみたい。

①《史記・十二諸侯表》には、周、魯、齊、晋、秦、楚、宋、衛、陳、蔡、曹、鄭、燕、呉の十四の国々があげられているが、このうち楚と呉は江南で、中原には入らない。

②《史記・燕世家》「燕外迫蠻貉」。《晋世家》「当此時、晋強、西有河西、与秦接境、北迫翟、東至河内」。《秦世家》「昔我穆公…西霸戎翟」。

③《燕世家》「二十七年、山戎来侵我、齊桓公救燕、遂北伐山戎而還」。

④狄は《史記》では翟、《左氏伝》では狄に作る。又易・遏・逖などにも作る。王国維の説では、戎、狄はその民族の本名ではなく中国語で、戎は兵のこと、狄は遠いの意とする。又狄には白狄・赤狄の別がある。

⑤⑥《晋世家》「五年、伐圍戎、得圍姫、圍姫弟、俱愛幸之……命重耳促自殺。重耳踰垣、宦者追斬其衣袪。重耳遂奔翟。」

⑦《晋世家》「重耳母、翟之狐氏女也。其母、重耳母女弟也。」

⑧《晋世家》「晋唐叔虞、周武王子而成王弟。」

⑨《晋世家》「虢仲、虢叔、王季之子也。為文王卿士」。《左伝・僖五年》「虢仲、虢叔、王季之穆也」。杜氏解「虢仲、虢叔、王季之子、文王之母弟也」。

⑩《呉世家》「呉太伯、太伯弟仲雍、皆周太王之子、而季歴之兄也。……太伯之奔荆蠻、自號句呉。……太伯卒、無子、弟仲雍立、是為呉仲雍。仲雍卒、子季簡立。季簡卒、子叔達立。叔達卒、子周章立。是時周武王克殷、求太伯、仲雍之後、得周章。周章已君呉、因而封之、乃封周章弟虞仲於周之北故夏虚、是為虞仲、列為諸侯。」

⑪《晋世家》「虞君曰、晋我同姓、不宜伐我。」

⑫《晋世家》「晋献公作二軍。公将上軍、太子申生将下軍、趙夙御戎、畢萬為右、伐滅霍、滅魏、滅耿。」《魏世家正義》「晋州霍邑県……本春秋時霍伯国也。」

⑬《郊玄・毛詩魏譜》「魏者…周以封同姓焉」《正義》「襄二十九年〈左伝〉曰…虞・虢・焦・滑・霍・楊・韓・魏、皆姫姓、是与周同姓也。」

⑭《古今姓氏書弁証》「耿…出自姫姓、侯伯之国。」

⑮《晋世家》「趙盾曰、立襄公弟雍、好善而長、先君愛之、且故好也。……賈季曰、不如其弟来……作士會如秦迎公子雍、賈季亦使人召公子乗於陳、趙盾廃売季、以其殺陽処父、十月、弑襄公、十一月、

賈季奔翟。」

⑯〈晉世家〉「先殺以首計而敗晉運河上、恐誅、乃奔翟、与翟謀伐晉。」

⑰〈晉世家〉「襄公元年春、秦師過周、無礼、王孫滿譏之。兵至滑秦師覺而還、滅滑而去」、〈左伝・成十三年〉「殄滅我費滑」又〈襄十八年〉「楚師伐鄭、侵費滑」〈左伝・宣八年〉「楚為罪舒叛故、伐舒蓼、滅之、楚子囊之、及滑汭、盟貝、越而還」。〈杜解〉「滑、水名」

⑱〈晉世家〉「四年、秦穆公大興兵伐我、度河、取王官、封殽尸而去。」

⑲〈晉世家〉「五年、晉伐秦、取新城、報王官役也」

⑳〈晉世家〉「欲和諸侯、與秦桓公夾河而盟、歸而秦倍盟、與翟謀晉。」

㉑鮮虞については、その出自は「實子封朝鮮」を始封とする説の他、子姓説、姬姓説、隗姓説など諸説あり。〈左伝、昭和十二年〉「仮道於鮮虞」〈杜解〉「鮮虞白狄別種在中山所市県、昔陽肥国都、楽平沽県東有昔陽城」〈疏〉鮮虞姬姓白狄や者、世本文也」

㉒〈晉世家〉「三年、晉会諸侯」〈索隠〉「於鶴沢也。」

㉓〈晉世家〉「公卒實絳、任之政、使和戎、戎大親附」

㉔〈晉世家〉「十一年、悼公日、自吾用魏絳、九合諸侯、和戎、翟、魏子三力也。」賜之楽、三讓乃受之」

㉕これは郊廟祭祀の舞楽ではなく、北方民族の舞楽隊であったと思われる。当時音楽が非常に盛んであったことは、一九六〇年扶風斉家村周代墓から発掘された編鐘でも理解される他、論語にも音楽舞踏に触れた記述が幾つかある。又一九七七年、湖北省随県曾侯乙墓から出土した編鐘・編声は、南方系の音楽をかなでたものであろうか、その壮大さは、戦国期の音楽の盛んであったことを十分にものがたる。

㉖郭沫若〈両周金文辞大系〉に杕氏壺」かあり、その銘文に「杕氏福永歳實鮮干可是金孯盛台為弄壺其頭既好多寡不甘盛昌匪敵肝我室家宅鹽母逡寶在我車」とあり、その拓及び釈文を載す。郭氏はその釈文に「林既詩林杜「有秋之杜」之杕序釈文「本或作夷狄字」顔氏家訓書証「詩「有林之杜」江南木竝木旁施大、而河北本皆為夷狄之狄、説亦如字」、疑比林氏蓋白狄人、諱其字而改書為林也。歳實當是歳時聘問之意、實読為賓、鮮干既鮮虞」とする。

㉗〈左伝・僖三十三年〉「晉侯敗狄于箕、郤缺獲白狄子。」〈杜解〉「故西河郡有白部胡」。

㉘東胡族の一支、秦漢の時代に西喇木倫河と洮兒河の間に遊牧していた。北匈奴が西へ遁った後匈奴の故地に入り強大となった。

㉙〈偽孔伝〉は〈虞書〉と〈夏書〉に分け、馬融・鄭玄・劉向は〈虞夏書〉という。〈堯典・序〉「昔在帝堯、聰明文思、光宅天下、將遜于位讓于虞舜、作堯典」

㉚〈晉世家〉「初、武王与叔虞母會時、夢天謂武王曰、余命女生子、名虞、余与之唐、及生子、文在其手曰虞、故遂因命之曰虞。」

㉛鮮虞が史書に現われるのは〈春秋・昭十二年〉である。それまでは、狄・白狄・白狄子・赤狄などとして出ている。〈春秋〉〈左伝〉ともに鮮干の名称は見えない。

㉜〈左伝、昭十二〉「夏六月晉荀吳偽会齊師者仮道於鮮虞、遂入昔

陽、」

㉝この時、高価な贈り物を持参したかどうか史実としては解らないが、先に献公二十二年、晉が虞国に道を仮りて虢を伐とうとした時〈晉世家〉「荀息乘屈産所遺虞屈産之乘馬牽之獻公、獻公笑曰、馬則吾馬、齒亦老矣」とあり、又、〈韓非子、喩老〉によれば、虞君は、屈産の馬四頭と乘璧の璧を欲した故に、宮之奇の諫に耳をかさなかったというから、この時、晉はやはり何等かの贈物を持参したと考えられる。

㉞〈晉世家〉「晉復假道於虞以伐虢、虞之大夫宮之奇諫虞君曰、晉不可假道也、是且滅虞、……虞公不聽、遂許晉、宮之奇以其族玄虞、其冬、晉滅虢、虢公醜奔周、還、襲滅虞。」

㉟〈韓非子・喩老〉「晉獻公將欲襲虞、遺之以璧馬、知伯將襲仇由、遺之以広車」

㊱〈燕世家〉「惠公元年、齊高止来奔、六年、惠公多寵姬、公欲玄諸大夫而立寵姬宋、大夫共殺姬宋、惠公懼、奔齊、四年、齊高傒如晉、請共伐燕、入其君、晉平公許、与齊伐燕、入公、惠公至燕而死、燕立悼公。」

㊲〈左伝・昭十二年〉「秋八月、壬午滅肥以肥鮮卑歸」

㊳〈漢書地理志・肥如顔注〉「肥子奔燕、燕封於此也。」、〈水経・濡水注〉「小沮水又南流与大沮水合而為盧水也、盧水有二源、源小沮、大沮、大沮合而入于玄水、又南与温水合、水出肥如城北、西流注于玄水」。小注「桑欽説、盧子之書言、晉既滅肥、遷其族于盧水。」

㊴更に後の中山国にさえ、移動国家的形態は、いくらか残っていたように考えられる。それは、一九七四、河北省平山県の中山国王墓から出土した文物の中には、「十五連盞燭台」「銀製頭部男子像燭台」「合子形蟠螭付燭台」などのように組み立て式のもので、秀れたものが多く、又円形テント支柱頭部金具或はその支柱の立派なもの、或は、円形の銅の柱を支えたと思われる金具などがあるのをみると、やはり移動の為の便利さを考えて作られているように思われるからである。

㊵〈左伝・昭十三年〉「鮮虞人聞晉師之悉起也、而不警辺、且不修備、晉荀吳自著雍以上軍侵鮮虞、及中人、驅衝競、大獲而歸。」

㊶〈春秋〉〈左伝・昭十五〉「秋晉荀吳師師伐鮮虞開鼓、」

㊷㊸〈左伝・昭十五年〉「鼓人或譁以城叛、穆子弗許……使人或譁降、使其民見……鼓人告食竭力盡、而後取之、克鼓而反、不戮一人、以鼓子臺駟歸」

㊹〈左伝・昭二十二年〉「晉之取鼓也、既献、而反鼓子焉。」による。

㊺〈左伝・昭二十一年〉「(魯)公如晉、及河、鼓叛晉、晉將伐鮮虞、故公辞。」

㊻〈左伝・昭二十二年〉「六月、荀吳略東陽、使師偽雜者、負甲以息于昔陽之門外、遂襲鼓滅之、以鼓子臺駟歸、使涉佗守之」

㊼〈趙世家〉「中山武公初立」索隠「系本云、中山武公居顧」鼓と顧とは音近し。

㊽〈戦国策・中山策〉に、この頃の事を述べたものとして「伐中山・中山君亡」の一句が見えるがこれは誤り。

㊾㊿〈左伝・定三年〉「秋九月、鮮虞人敗晉師于平中、獲観虎、特

其勇也」

51〈左伝・定四年〉晉の荀寅が范獻子に言った言葉に「水潦方降、疾瘧方起、中山不服、弃盟取怨、無損于楚、而失中山」とあることから察せられる。

52〈春秋・定四年〉「晉士鞅、衛孔圉師師伐鮮虞」

53〈左伝・定八年〉「晉士鞅會成桓公侵鄭、囲虫牢、報伊闕也、遂侵衛」

54〈左伝・定九〉「晉東乗在中牟……乃伐齊師敗之」

55〈春秋・定十年〉「晉趙鞅師師囲衛」

56〈春秋・定十二年〉「冬十日癸亥、公會齊侯盟于黄」

57〈春秋・定十四年〉「公會齊侯・衛侯于牽。」

58〈左伝・哀元年〉「師及齊師、衛孔圉、鮮虞人伐晉、取鐵・蒲」

59〈春秋・哀三年〉「春、齊國夏・衛石曼姑・師師囲戚」「求援于中山」

60〈左伝・哀四年〉「夏楚人既克夷虎……以臨上籍。」

61〈晉世家〉「吳延聚季子来使、与趙文子、韓宣子、魏獻子語、曰、晉国之政、卒歸此三家矣。」

62〈晉世家〉「齊使晏嬰如晉、与叔向語、叔向曰、晉、季世也、公厚賦為台池而不恤政、政在私門、其可久乎、晏子然之。」

63〈左伝・哀四年〉「冬十一月、邯鄲降、荀寅奔鮮虞」

64〈左伝・哀四年〉「十二月、弦施逆之、遂堅臨、国夏伐晉、……納荀寅于柏人

65〈左伝・哀五年〉「春、晉囲柏人、荀寅・士吉射奔齊。」

66〈晉世家〉「范、中行友、晉君擊之、敗范、中行、范、中行走朝歌、保之。」

67〈春秋・哀六〉「晉趙鞅師師伐鮮虞」

〈左伝・哀六年〉「春、晉伐鮮虞、治范氏之乱也」

68〈趙世家〉「知伯與趙韓魏分范、中行地以爲邑。出公怒……遂反攻出公、出公奔齊、……哀公四年、趙襄子、韓康子、魏桓子共殺知伯、盡并其地。」

69中山という国名は〈春秋〉の経文には出てこない。〈左伝〉に三度あるのみである。その二つは定公四年の荀寅の言葉として、又一つは、哀公三年の「求援于中山」である。

70〈呂氏春秋・仲秋紀〉「中山亡邢、狄人滅衛」

71〈秦本紀〉「舜賜姓嬀氏」〈趙世家〉「晉国且世襄、七世而亡、嬀姓將大敗周人於范魁之西、亦不能有也」索隱「嬀、趙姓也」

72〈秦本紀〉「秦之先、帝顓頊之苗裔……大業取少典之子、曰女華、女華生大費……大費生子二人、一曰大廉、実爲裕氏、二曰若木、実費氏、其玄孫曰費昌、子孫或在中国、或在夷狄。」

73〈魏世家〉「秦与戎翟同俗」〈秦世家〉「秦僻在雍州、不与中国諸侯之会盟、夷翟遇之。」

74〈趙世家〉「於是趙北有代、南并知氏、强於韓、魏、遂祠三神於百邑、使原過主霍泰山祠祀。」

75〈趙世家〉「乃共殺其子而復迎立獻侯、十年、中山武公初立。」、〈索隱〉「按、中山、古鮮虞国、姬姓也。系本云中山武公居頃、桓公徒靈寿、爲趙武靈王所滅、不言誰之子孫。」

76〈平山中山王墓出土銅方壺銘文〉に「隹朕皇祖文武、超祖成考」の文字が見える。武公の前に文公がいたとすると〈趙世家〉の「武

公初立」と矛盾する。建国の王がその大功のあった父親を追尊することはよくある。最も有名なのは、殷周の易姓革命をなしとげた武王は、その父西伯を追尊して文王とした。降って三国魏を建てた曹丕文帝は、大功のあった曹操を追尊して武帝としこともよく知られた例の一つである。

㊼〈呂氏春秋・先識〉「中山之俗、以晝為夜、以夜継日、男女切倚、固無休息、康樂歌謠好悲、其主弗知悪」又〈水經注・滱水〉に「其後桓公不恤國政周王問太史餘曰今之諸侯孰先亡乎對曰天生民而令有別所以異禽獸也今中山淫嘗康樂逸慾無度其先亡矣後二年果滅魏文公以封太子擊也」の文がある。これにしたがえばこの時代は桓公ということになる。

㊽〈韓非子・説林上〉に「樂羊為魏將而攻中山、其子在中山、中山之君烹其子而遺之羹、樂羊坐於幕下而啜之、盡一杯、文侯謂堵師贄曰、樂羊以我故而食其子之肉、答曰、其子而食之、且誰不食、樂羊罷中山、文侯賞其功而疑其心」とある。

㊾〈韓非子・外儲説左下〉「(翟黄)曰、君謀欲伐中山、臣薦翟角而謀得果、且伐之、臣薦樂羊而中山拔、得中山」とある。〈魏世家〉にもほぼ同文がある。

㊿〈韓非子・説林上〉「魏文侯借道於趙而攻中山、趙肅將不許、趙刻曰、君過矣、魏攻中山而弗能取、則魏必罷、罷則魏輕、魏輕則趙重、魏拔中山、必不能越趙而有中山也、是用兵者魏也、而得地者趙也、君必許之、許之而大歓、彼將知君利之也、必將輟行、君不如借之道、示以不得已也」とある。

(51)〈韓非子・外儲説左下〉「憂欲治、臣(翟黄)薦李克而中山治」とある。

(52)〈韓非子・難二〉「李兌治中山、苦陘令上計而入多、李兌曰、語言辨、聰之説、不度於義、謂之寃言、無山林深谷之利而入多者、謂之寃貨、君子不聰寃言、不受寃貨、子姑免矣。」とある。韓非子はこのあと「或曰」として里克の考え方を強く批判し、歳入消費の理を心得ぬ者の弊害の語だと述べている。李兌の政策には多分無理な点があり、当時からそれを指摘する者があり、一部では里克の失政とする判断もあったのであろう。

(53)〈魏世家〉「九年翟敗我于澮」

(54)注(76)の銅方壺銘文には趙祖と見える。注(77)も参考となる。〈樂毅列伝〉「樂毅者、其先祖曰樂羊、樂羊為魏文侯將、伐取中山、魏文侯封樂羊、卿於靈寿、其後子孫因家焉、中山復國、至趙武靈王時復滅中山」とあるから桓公の靈寿遷都は樂羊の後を受けたものか

(55)注(75)の〈索隠〉の文に見える。

(56)注(82)から判断出来る。

(57)〈趙世家〉「敬侯元年、武公子朝作乱、不克、出奔魏、趙始都邯鄲」

(58)〈趙世家〉「十年、与中山戰于房子」

(59)〈趙世家〉「十一年、魏、韓、趙共滅晉、分其地

(60)〈趙世家〉「伐中山、又戰於中人」

(61)〈趙世家〉「六年、中山築長城」

(62)注(84)に掲げた銅方壺銘文に成考と見える。

(63)(64)〈孫子呉起列伝〉「孫武既死、後百餘歳有孫臏、臏生阿鄄之間、臏亦孫武之後世子孫也、孫臏嘗与龐涓俱学兵法、龐涓既事魏、得爲

惠王將軍、而自以爲能不及孫臏、乃陰使召孫臏、臏至、龐涓恐其賢於己、疾之、則以法刑斷其兩足而黥之、欲隱勿見」とある。後斉の将となった孫臏の減龐の策略にかかった魏の龐涓が馬陵で大敗する話は有名。又〈孫臏兵法〉は古くから失われていたが一九七二年四月、山東銀雀山前漢墓から簡として発掘された。

⑯前掲、中山王墓から出土した〈銅鼎銘文〉に「昔者吾先考成王、早弁群臣、寡人幼童未通智、惟賴母是從」の一文がある。

⑰〈魏世家〉「(惠王) 二十八年、斉威王卒、中山君相魏。」

⑱伝世の文献にはない。前掲平山県中山王墓の主、[illegible]に作る。

⑲〈中山王墓出土銅鼎銘・銅圜壺銘・銅方壺銘文〉中で、中山王を佐けた無上の有徳の臣・邦相としてほめ讃えられている人物。銘文では[illegible]に作る。

⑳文献中、司馬の姓を持つ中山の相は他にいないので、今、司馬賁に司馬喜を当てる。

㉑〈韓非子・内儲説下六微〉「司馬喜、中山之臣也、而善於趙、嘗以中山之謀微告趙王」とある所からも解る。又銅圜壺銘文では、嗣王盍に、燕噲の話を持ち出して注意を促しているかに見える。

㉒〈韓非子・内儲説下六微〉「司馬喜殺委蠕而季辛誅」とあり、又「司馬喜新与季辛悪、因微令人殺委蠕、中山之君以爲季辛也、因誅之。」とある。

㉓〈韓非子・内儲説下六微〉「中山有嘍公子、馬甚瘦、車甚弊、左右有私不善者、乃爲之譖王曰、公子甚貧、馬甚瘦、王何不益之馬食王不許、左右因微令夜燒銅瘞、王以爲嘍公子也、乃誅之。」「故燒銅瘞而中山罪。」とある。

㉔〈銅鼎銘文〉「於呼、悠哉、天其有経于茲厥邦、是以啓人匡任之邦、而去之遊、亡憂惕之慮」とある。又〈銅方壺銘〉には「余嘗知其忠誠旃、而將任之(賜)邦、是以遊夕飲食、寧有憂惕」又〈銅圜壺銘〉には「隹不辜或得賛佐司馬賜、而重任之邦。」とある。

㉕〈中山王嘗の鼎や壺の銘文には多くの詩経、礼記等の文が使われている。〈平山墓葬群与中山文化〉李学勤〈文物〉一九七七年一期に詳しい。

㉖中山王墓出土文物の豪華さからそれが解る

㉗注㉔㉕から理解される。

㉘中山王嘗の鼎・圜壺・方壺の銘文にあらわれた王嘗の警戒より、又盍に対する戒にはその企図がほのみえる。

㉙〈趙世家〉「(武靈王) 十年、…燕相子之爲君、君反爲臣」〈燕世家〉「(噲) 王因収印自三三石束已上而效之子之、子之南面行王事、而噲老不聴、頗爲臣、国事皆決於子之、三年、国大乱、百姓恫恐」

㉚〈燕世家〉「太子因要党聚衆、将軍市被圍公宮、攻子之、不克、……以徇、因構難数月、死者数万、衆人恫恐、百姓離志。」

㉛〈燕世家〉「孟軻謂斉王曰、今伐燕、此文、武之時、不可失也……以因北地之衆以伐燕、士卒不戰、城門不閉、燕君噲死、斉大勝。」

㉜〈銅圜壺銘文〉「則臣(相邦)不忍見旃、賜願從士大夫以譖燕強是以身蒙辛胄以誅不順。」又〈鼎銘文〉には「今吾老賜親率三軍之衆以征不義邦……奮伐振鐸闢啓封疆、方数百里列城数十、克敵大邦。」

㉝この話しは〈韓非子・外儲説右下・説疑〉等にとられている。

⑩〈中山王銅鼎銘文〉では「於呼、語不廢哉、寡人聞之、与其溺于人旃、寧溺于淵、昔者燕君子噲、睿弁夫情、長為人宗、閑于天下之勿欠、猶迷惑于子之、而亡其邦」といい、他の銘文もほぼ同じ。

⑪〈戦国中山王霍墓出土的〈兆域図〉及其陵園規制的研究〉傅熹年、〈戦国中山王陵及兆域図研究〉楊鴻勛、いづれも〈考古学報〉一九八〇年第一期に詳しい研究がある。

⑫〈銅圜壺銘文〉に「胤嗣好蚤、敢明揚告、昔者先王……」とある。他の文献には見えない。

⑬〈趙世家〉「五国相王、趙独否曰、無其実、敢處其名乎、令国人謂己曰君」

⑭〈趙世家〉「先時中山負齊之强兵、侵暴吾地、係累吾民、引水囲鄗、微社稷之神靈、則鄗幾於不守也」

⑮〈趙世家〉「而遠可以報中山之怨」「雖暴世以笑我、胡地中山吾必有之」

⑯〈趙世家〉「十七年、王出九門、爲野台、以望齊、中山之境」

⑰〈趙世家〉「吾欲胡服、樓緩曰、善、群臣皆不欲」

⑱⑲〈趙世家〉「使王緩告公子成曰、寡人胡服、將以朝也……王遂往之公子成家」

⑳〈趙世家〉「乃賜胡服、明日服而朝、於是始出胡服令」

㉑〈呂氏春秋・先識〉の文

㉒〈趙世家〉「二十年、王略中山地」

㉓〈趙世家〉「王北略中山之地、至於房子、遂之代、北至無窮、西至河、登黄臺之上」

㉔〈趙世家〉「二十一年、攻中山」

㉕〈趙世家〉「趙招爲石軍、許鈞爲左軍、公子章爲中軍、王并將之」

㉖〈趙世家〉「二十三年、攻中山」

㉗〈趙世家〉「復攻中山、攘地北至燕、代、西至雲中、九原」

㉘〈秦本紀〉「中山君奔齊死」

㉙〈戦国策・二十一〉に「天下争秦、秦按爲義、存亡繼絶、固危扶弱、定無卯之君、必起中山與勝焉、秦起中山與勝、而趙、宋同命、」という蘇代の言葉があり、鮑本の注に「勝、中山俊」という。

㉚〈秦本紀〉「十一年、齊・韓・魏・趙・宋・中山五国共攻秦」とあるが、全部で六国というのは中山は数に入っていないのであろう。

㉛〈趙世家〉「立王子何以爲王……武靈王自号爲主父」

㉜㉝〈韓非子・外儲左上〉「趙主父使李疵視中山可攻不也、還報曰、中山可伐也、君不亟伐、將後齊、燕」

㉞〈韓非子・外儲左上〉前注につづく文

㉟〈趙世家〉「惠文王二年、主父行新、遂出代西遇樓煩王於西河而致其兵」

㊱〈田敬仲完世家〉「二十三年、與秦擊敗楚於重丘、二十四年、秦使涇陽君質於齊、二十五年、歸涇陽君于秦、孟嘗君薛文入秦、卽相秦、文亡去、二十六、齊與韓魏共攻秦、至函谷軍焉、二十八年、秦與韓河外以和、兵罷、二十九年、趙殺其主父、齊佐趙滅中山」

㊲〈趙世家〉「惠文王三年、滅中山、遷其王於膚施」